

大規模災害における心理学的研究動向

—子どもに焦点を当てて—

○渡辺久留美・千葉柊作・久我樹里佳・菅原朋・富田悠斗
(東北大学大学院教育学研究科)

I 問題と目的

阪神淡路大震災や東日本大震災をはじめとする大規模災害に関する研究は、その影響や支援の在り方について数多くなされている。しかし、多岐にわたる領域の大規模災害研究は整理されていないという現状がある。本研究では、大規模災害における心理学的研究動向、特に子どもに焦点を当てた心理学的研究動向を整理すること、そこから考えられる今後必要とされる研究や支援について提言することを目的とする。

II 方法

1. 選定方法

「CiNii Articles」において「(震災 OR 災害) AND 子ども AND (こころ OR 心理 OR 支援)」をキーワードとして検索し、2018年6月段階で569件の論文が抽出された。

2. 選定の基準

学術誌以外の論文、心理面の記述が無い論文、著者不明の論文、シンポジウム等の論文を除き、選定を行ったところ、270件が抽出された。

3. 分類の仕方

震災勉強会に所属する学生複数名が論文の一部を読み、大カテゴリー8つ(震災種別、資料種別、地域、場所、対象者、テーマ)を設定した。指導教員及び震災勉強会に所属する学生8名が、270件の論文を、その種類に該当するか、“あり・なし”でコード化を行った。テーマの支援方法については、更にKJ法によってカテゴリー分けを実施した。

III 結果と考察

1. 論文出版年と研究種別

2011年以降論文数が増加していることから、東日本大震災をきっかけとして研究が盛んになった。しかし2013年を境に論文数は減少しており、継続的な研究は少ない。論文種別については、調査研究が少なく、被

災者の侵襲性や当事者研究の難しさが考えられる。

2. 対象地域

東日本大震災の被災三県の論文が多く、震災をきっかけとした論文数の増加に比例していることがわかる。

3. 論文内の対象者(支援者・被支援者)

学校関係や、機関・団体の支援者に焦点を当てた論文が多く、災害時の心理支援の担い手を反映している。被支援者では、幼児期・学童期・保護者に関するものが多くみられる。乳幼児や児童は保護者の養育が必要であるため、親が子どもや自身についての支援を必要としていることが考えられる。

4. 論文のテーマ: 状態像

ストレス反応・抑うつに関する論文が多いと考えられる。出版年のピークが2011年から2012年であることから、急性ストレス反応についての報告が多く、時間経過とともに、PTSDについての報告が多くなされるようになっている。

5. 論文のテーマ: 支援方法

支援方法は、心理相談、親子支援、教育、コミュニティ、医療の5つの大カテゴリーに分類された。心理相談については、電話相談やメール相談などの非対面式の相談に関する論文が少ない。このような相談活動を行っている団体の少なさと認知度の低さが背景として考えられる。

親子支援は、遊びや保養のようにレスパイトに関するものや、子どもの癒しに関する論文が多い。親に対する、子どもとの関わりについての相談や活動に関するものも多く、子どもと関わる際のニーズを反映していると言える。

IV 結語

研究種別では調査研究よりも主観的な報告が大半であり調査研究の蓄積が急務である。海外の論文との比較や、カテゴリーの再検討が必要である。